

青森試験地

公益財団法人日本植物調節剤研究協会
青森試験地 主任
佐々木 康成

植調青森試験地は、東北新幹線の七戸十和田駅より10km南方、青森県十和田市に設置されている。かつてこの地は八甲田山から噴出された火山灰が堆積して形成された三本木原台地と呼ばれる荒地であった。旧五千円札の肖像として知られる新渡戸稲造の祖父である傳と稲造の父十次郎は、奥入瀬川からこの不毛の地へ水を引き、後に稲生川と呼ばれる水路が作られた。これにより、この地は稲作と畑作、そして軍馬の生産地として発展した。現在は「まっしぐら」と「はれわたり」といった良食味品種を主力とした稲作が展開されており、畑作では生産量日本一を記録したこともあるニンニクや長ネギ、長いも、ゴボウ等を生産している。気候は太平洋側気候であり、5月から6月にかけては八甲田おろしと呼ばれる北西風、7月から8月にかけてはやませと呼ばれる偏東風が吹く。日照量が少なく低温が続く年には冷害を被るなど、稲作には大変厳しい環境である。

沿革

当試験地は、佐々木豊雄を主任とする畑作試験地として2006年に設立された。2008年から作物残留試験を実施し、2010年からは水稻の難防除多年生雑草であるシズイを対象とする薬効薬害試験を実施している。2020年には現主任である佐々木康成が引き継ぎ、その後は畑作試験を実施せず、専ら水稻作での除草剤適用性試験を行っている。

事務所と試験圃場

事務所と試験圃場の位置関係を図-1に示した。事務所・作業場（図-2）と資材保管庫を合わせた建物面積は約190㎡である。事務所近くにある長下圃場（1a）には水稻育苗用ハウスを設置しており、同じ長下という地番で少し離れたところにある水田圃場2枚（各10a）で適2試験を実施している（図-3）。その他にも水稻用除草剤の中規模試験を実施するために、長根尻に30aの水田圃場を1枚確保している（図-4）。近郊に砂土路川が流れる長下圃場は洪積砂壤土、南方に少し離れた長根尻圃場は埴壤土である。普通枠試験やシズイ試験では、1区2.1㎡を畔シートとプラスチックダンボールを用いて試験枠を設置している。

発生雑草

長下圃場ではシズイの薬効薬害試験を専用に行っており、全て自然発生としてシズイ、タイヌビエ、ホタルイ、アゼナ、少量だがヘラオモダカ、クサネムがみられる。長根尻圃場では除草効果の評価に使用している草種は埋め込みとしてタイヌビエ、ミズガヤツリ、ウリカワ、コナギ、イヌホタルイ、自然発生としてアゼナ、キカシグサ、ミゾハコベがある。ヘラオモダカやクサネムの発生も少量みられる。



事務所・作業場周辺拡大図



図-1 事務所と周辺の圃場



図-2 事務所・作業場



図-3 長下圃場



図-4 長根尻圃場

十和田の農業

全国流通量の約2割を占めるニンニクは、高級品種「福地ホワイト六辺種」の大きさと味の強さは高い評価を長く受け続けている。青森県東部で昔から生産され、郷土料理にもよく使われる長いもや青森県が生産量全国一位であるゴボウも県内有数の生産量を誇っている。また、有名生産地の空白時期を狙って出荷される長ネギは農家の収入増に一役買っている。

馬産地であることから馬肉も有名で、馬のスジ肉で作る馬

肉鍋や馬刺しは地元の味である。牛バラ肉と玉ねぎで作る十和田バラ焼きがB-1 グランプリで全国的に有名になったが、これは三沢市の料理屋さんのオリジナル料理が家庭料理として地元にも根付いたものである。

青森試験地が位置する十和田市は世界でも貴重な二重カルデラ湖である十和田湖を有し、そこから流れ出る奥入瀬溪流は、春は新緑、秋は紅葉の名所として知られる。整備が行き届いた散策のしやすさも相まって、自然の活力を体感できる景勝地として国内外から観光客を集めている。近くにお越しの際には、ぜひ当試験地にもお立ち寄りください。